「鳥と私の干渉模様」についての、あるいは、「応答」についてのノート

2025 年 12 月 14 日、横浜国立大学にて、ダンサー・振付家の中屋敷南（以下、N）らによる「鳥と私の干渉模様」（野外パフォーマンスワークインプログレス＋ワークショップ）がおこなわれた[1]。はじめに、約 25 名の参加者たちは、学内の中央図書館 1 階、メディアホールに集められた。気づくと、ヒヨドリらしき鳥の鳴き声の音声がスピーカーから流れていた――N は、開始時刻の 16 時になると、簡単に事前説明をおこない、もうひとりのメイン・パフォーマーである、俳優のキヨスヨネスク（以下、K）や、参加者たちとともにストレッチをおこなった。

「鳥と私の干渉模様」の前半は、ある種のワークショップ形式だと言える。最初の「聞く」というタスクは、メディアホール内の音――鳥の声や空調の音など――に注意を向けるというもの。そこで、ＮとＫは、ゆっくりと、しかし積極的にからだを動かしていたが、対して、多くの参加者は客席に座ったまま、そのタスクを実行していた。また、そこでは、3 名の記録撮影者がカメラを携えながら存在しており、それらの存在は、明らかに異質だった。そして、わたし自身は、記録をつけつづけていた（このノートは、その記録にもとづいて書かれているため、あくまで限られた情報しか提供しえないという点を、ここで明記しておく）。別々にではあるが、すべての人々が応答していた。

次のタスクは、「からだを動かす」――たんにからだを動かすのではなく、鳥の鳴き声にあわせて、それに応じるようにして、からだを動かす。はじめは、手のみを動かすように指示される。「鳥のさえずりを手に落とし込むような感じで」とＮが言った。確かに、本人の動きを見ると、その言葉を体現していると感じられる。その後、人々は、肩、脚、そして、あらゆる部位を動かしていく。

最後のタスクは、「声まね」――先と同じようにからだを動かしつつ、鳥の声をまねする。Ｋが「ただし、口笛はなし」という趣旨のことを注釈的に伝えた。ＮとＫは、平然とそのタスクをこなしてみせるが――とくにＫは、声に関する表現・実践を専門としている人物でもある――、それを見本とする、多くの参加者たちは、ときどき声を出しては、自嘲的な笑い声をもらしていた。

---

[1] 2025 年 10 月 9 日以降、継続的に稽古がおこなわれていた。参加者は、中屋敷南、キヨスヨネスク、ガラージュ（小田切駿、瀬尾憲司、渡辺瑞帆）、川村隆太郎（音楽）、瀧川宣之（音響）、相嵜颯（アーカイヴ記録・編集）、柴山陽生（稽古記録・リサーチ）。12 月 14 日にも、全員が参加している。

*ダナ・ハラウェイ『犬と人が出会うとき――異種協働のポリティクス』の索引における「応答」の項目は、33 カ所を指示している[2]。はじめに、12 頁。*

> *私の場合、長年にわたって、サイボーグ、サルや類人猿、オンコマウス、そして最近ではイヌといった力強い形象の内側から執筆を続けてきた。こうした形象は、いずれも、一方で可能性として想像される存在であり、同時に、熾烈な日常を体現する形象でもある。つまり、次元が錯綜し、各次元についてきちんと応答することが必要だ。本書では、こうした重複性を扱うが、こうした重複性は、むしろ、あやとり――世界に生息しようとする存在が、内的ならびに相互の作用を通して構成される遊戯――に関わるような作業なのかもしれない。出会いの前に、パートナーが存在するわけではない。あらゆる種は、その生きていると死んでいるとにかかわりなく、主体と対象とをかたちづくる出会いのダンスの結果生じる存在である。本書に出てくるパートナーや出会いは、文学表現ではなく、家庭、実験室、野外、動物園、公園、職場、牢獄、海、スタジアム、納屋、工場などで現在進行形で出会っているごく普通の存在だ。こうした形象たちは、つねに、ごく普通の結ばれた存在として、彼らに応答する者たちを「私たち／我々」という予測不能な存在へとまとめあげ、意味をかたちづくる形象たちでもある。*

*ここで、「応答」とは、ひとによってある種の形象たち――サイボーグ、サルや類人猿、オンコマウス、イヌ――に対してなされるものだと示唆されているようだ。謎めいた記述が少なくないが、とくに、「文学表現」に対する否定的な言及と「ダンス」に対する肯定的な言及は、どのようにして両立しているのかという点が気になる。はたして、前者は空想的であり、後者は現実的だと言うことができるのだろうか。（あらゆる種の）身体に対する「信」を共有すべきなのだろうか。*

そして、「声まね」のタスクが終わると、「日が暮れかけているので、そろそろ外へ出ましょう」とNが言った。注意事項として、人間の言葉をしゃべらないこと、Nが鈴を鳴らすのが移動の合図であること、電子機器の音が出ないようにすることが伝えられる。それから、「みなさんも慣れてきたら、ここでやったことを実践してもいいです」とNが参加者たちに向けて言った。

*ひとつ飛ばして、27 頁。*

---

[2] ダナ・ハラウェイ『犬と人が出会うとき――異種協働のポリティクス』高橋さきの訳、青土社、2013 年、（1）頁。

*こうした出会いにかかわる事がらは多く、結果の保証はない。目的論的に保証されるものは何もなく、社会的にも、生態学的にも、科学的にも、幸せな結末も、不幸せな結末も、約束されてはおらず、いくばくかの気品をもって一緒に時を過ごす機会があるというだけである。動物／人間、自然／文化、有機／技術、野生／家畜といった「大いなる分岐」はへしゃげて、ごく日常的で世間的な差異となる。つまり、至高かつ究極の目的へと上り詰めるのではなく、結果を生み、互いに敬意をもって応答しあうことが求められるような差異となるわけである。*

*この箇所における「至高かつ究極の目的へと上り詰める」ことの拒否は、先ほどの「文学表現」に対する否定的な言及と対応していると思われる。しかし、なによりも重要なのは、「応答」とは、一方的にではなく、相互的になされるべきものだと示唆されていることだろう。「ごく日常的で世間的な差異」の関係にあるもの同士が、「互いに敬意をもって応答しあうこと」。*

図書館棟を出て、野外音楽堂（以下、野音）へ。わたしが遅れてそこに向かうと、参加者たちが野音の全体に散らばって立っていた。それを見た家族が、「あれ、なんだろうね？」と話している。確かに、大学内にこれだけの人数が突っ立っている様子は、不気味に感じられてもおかしくない。しばらく立っていると、カラスの声——やはり、生の鳴き声は格別だ——と、野音の中央のコンクリート上でスポーツをする学生のたてる音が際立って聞こえてきた。そして、やはり外は寒い。

2 人を探してみると、K はコンクリートのところに、N は野音の端の芝生のところにいた。N は、雨に濡れた芝にからだをつけながらパフォーマンスしており、少なからぬ数の参加者たちが、それに見入っていた。しばらくすると、コンクリート上に置かれたスピーカーからドローンが聞こえてきた。それを合図にしてか、K が歩いて、N のほうへと向かっていく——K のそばにいた参加者たちが、それに続いて移動すると、そこでは、ある種の群れが形成されているかのようだった。

N と K が近い距離でパフォーマンスを始めると、いよいよパフォーマーと観客が二手に分かれ、はっきりと役割を分担しはじめる。N はそれを感じたのか、観客の群れのなかを横切るように移動する。ほんのひとりふたりの参加者が、積極的に K に関与することを試みているようにも見える。しかし、パフォーマー／観客の分割は、すでに取り返しのつかないところまできている（そのこと自体、少なくともわたしにとっては問題ではないのだが）。

スピーカーから、鳥の声がかすかに聞こえてくる（おそらく、メディアホールで流れていたのと同じ音声だろう）。それが N と K に影響を与えている——しかし、2 人の応答はあくまで動きによるものであり、声によってその音声に応答しているようには感じられない。応答がそのようなかたちを取ったのは、複数種の鳥の声に合わせて動くことがむずかしか

ったからかもしれないし、録音された鳴き声よりも、生の鳴き声のほうが、より応答しやすかったからかもしれない。いよいよ日が暮れて暗くなってきた——街灯の光が、2 人を照らし、大きな影を作る。

*続いて、33–46 頁。前半は、猫とジャック・デリダの出会いについて。「デリダは、基本問題を、猫が「語れる」かどうかではなく、応答が何を意味し、応答を反応からいかに区別するのかを理解することは可能なのだろうか——人間にとって、またそれ以外の存在にとって——というところに置いたといえる」[3]。ここでは、デリダが、「語り」という言語的なコミュニケーション方法を「応答」の必要条件だと考えなかった点が評価されているようだ。だが、続く箇所では、彼の行動や議論の不十分さが指摘されている。*

> *しかし、猫がそれ以外の何をしていたにせよ、「他者」を前にしたデリダという人間の前向きの全裸は、デリダ自身の哲学の系譜にとっては重大な意味があったにせよ、雌猫の側にとってみれば、相方であるはずの人間の気が散って、通常どおり礼儀正しい挨拶をかわしたり、受け止めたりすることができなくなる以外、まったく意味を持たなかった。この猫とどうやって挨拶をかわし、相互応答的で礼儀正しいダンスで毎朝をスタートさせればよいのかがデリダにはわからなかったのではなかろうかと考える用意が私にはあるが、だとすれば、あの意識的かつ具体的な遭遇は、デリダの公の場での哲学を前に進める動機にはならなかったということになる。なんとも残念なことだ[4]。*

*ここでは、「応答」とは、ある意味において反復的なものだという点が主張されているのかもしれない。ともかく、デリダにとって「重大な意味」を持っていたことが、猫にとっては「まったく意味を持たなかった」という指摘は、辛辣な物言いではあるが、ある種の説得力を持っていると思われる。*

N が鈴を鳴らすと、人々はスムーズに移動しはじめ、野音を離れていった。K が、歩きながら激しくカラスの声まねをすると、観客はそれに少し驚いている様子だった。しばらく歩くと、人々の群れは、通路上——教育学部講義棟 7 号館と教職大学院／教育学部附属教育デザインセンターのあいだ——に落ち着いた。Kは空を見上げながら、積極的にカラスの声まねをし、観客もそれにつられるようにして、空を見上げていた。Nも、歩き回りながら、ときどきカラスの声まねをしていた。気になるのは、2 人が声を出すことに集中していたためか、野音でおこなわれていたような、応答としての動きが失われている点だ。

---

[3] 前掲書、35 頁。

[4] 前掲書、39–40 頁。

ＮもＫも自身の声によって、カラスの群れを呼び寄せることに専念しているようだった。しかし、それでも、カラスはほとんどやってこなかった（もっとも、カラスを呼び寄せることは原理的に不可能な試みというわけではまったくなく、実際、稽古中に 2 人はそのことに成功している）。

人々が移動しはじめる寸前に、散歩中らしき小型犬がやってきて、まるで散歩ルートをふさがれていることに対する不満を訴えるかのように、激しく吠えつづけた。Ｎは少し離れたところで、犬の声に自身の声で応答した。わたしは、より近くで犬の姿を見たいと思ったが、人々の群れが移動しているため、あきらめざるをえなかった。犬は吠えつづけていた――振り返ると、犬のシルエットとピンク色に光る首輪だけが見えた。

*後半は、ヒヒたちとバーバラ・スマッツの出会いについて。その結論によれば、*

> *これは、物質的‐記号論的なダンス――パートナーはすべて顔をもっているが、誰も名称に依拠することはないようなダンスの行為――に根ざした、真実をめぐる極めて興味深い定義だろう。この種の真実は、これまで継承されてきた人間／人間以外、自然／文化といったどのカテゴリーにも容易にはあてはまらない。私としては、これは、デリダが「名前がないことを、矢如以外のなにものかとして考える」べく追究した貴重な成果だと考えたい。これはまた、私が仲間たちと切琢磨しているアジリティー競技――犬と人間が一緒に行うスポーツ――で、私たちが「率直（honest）」といったときに意味することがらの一つなのではないかとも思う。なお、私たちのいう「率直／正直（honest）」が、犬はウソをつけるのか、もしウソがつけるのならウソをつくことについてウソをつけるのか、といった哲学や言語学の手垢のついた議論をめぐるものでないことだけはまちがいない。具現化された非言語コミュニケーションをめぐっての真実や率直さは、意味ある他者を幾度も振りかえり見ること――何度も何度も振りかえり見ること――に基づいている。そして、こうした真実や率直さは、動物だけが所持することができて人間は、指示的にウソをつき、そのことをわきまえているという幸せな罪によって画定されているといった文彩のないファンタスティックなタイプの自然ならではの正当性ではなく、こうした真実語りは、むしろ、協働的に構成される自然‐文化のダンスの行為や、尊敬することや、何度も振りかえって見る存在を認めることをめぐってのものである。こうした真実は、常に軽快で、多様な種にとっての未来がある。respecere[5]。*

*ここでは、スマッツが、デリダのプロジェクトを彼以上に忠実になしとげた存在として位置づけられていると考えられる。とくに重要なのは、「協働的に構成される自然‐文化の*

---

[5] 前掲書、45–46 頁。

*ダンスの行為」、それが「真実」につながるという主張ではないだろうか。しかし、誰がそれを「真実」だとみなす存在として想定されているのだろうか――この文章を、パートナー同士の二者関係において「真実」があらわれるという趣旨の内容として理解することは可能だが、しかし、そこで、それらのパートナー以外の存在はその特定の「真実」にアクセスできるのだろうか。*

人々の群れは、図書館のほうへと向かっていった。自動ドアの前を通ると、それが開く。ついに、メディアホールの目の前に着いて、そこで空を見上げると、カラスが群れをなし、鳴きながら飛んでいた。そこで、人の群れとカラスの群れの類似性を見て取ることは可能かもしれないが、それらは応答関係にはない。ＮとＫは、変わらず、声まねによってカラスに訴えかけていた。わたしは、寒さを感じていた――そのとき、そばの参加者の一人が、小さな声で鳴いた。「カァ」。

*規則にしたがって、ここで終わりにしなければならない。「respecere」、振り返って見ること。*

（柴山陽生）